

Title	大学新入生の友人関係におけるFTFおよびSNSコミュニケーション
Author(s)	黒川, 雅幸; 吉武, 久美; 中山, 真 他
Citation	対人社会心理学研究. 2015, 15, p. 55-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54427
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大学新入生の友人関係における FTF および SNS コミュニケーション

黒川雅幸(愛知教育大学教育学部)

吉武久美(人間環境大学人間環境学部)

中山 真(鈴鹿短期大学)

三島浩路(中部大学現代教育学部)

大西彩子(甲南大学文学部)

吉田俊和(岐阜聖徳学園大学教育学部)

本研究では、大学新入生の友人関係における対面(FTF)やソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)を使用したコミュニケーションについて、縦断的に検討することが目的であった。同じ専攻に所属する大学1年生64名(男性21名、女性43名)を対象に、5月、7月、10月、12月の計4回質問紙調査を実施した。分析の結果、4時点において、友人・知人数、FTF および SNS コミュニケーション頻度は変化がなく、FTF および SNS コミュニケーション・ネットワークは4時点のいずれにおいても類似していた。5月から7月と、5月から12月の SNS コミュニケーション・ネットワークの変化は FTF よりも大きかった。5月からの FTF コミュニケーション頻度の増加が7月における友人関係満足感を予測し、10月からの友人・知人の人数の増加や FTF コミュニケーション頻度の増加が12月の友人関係満足感を予測する結果が得られた。

キーワード: 新入生、大学生、FTF、SNS、友人関係満足感

問題と目的

大学入学後の1年間は、高等学校の時の友人関係から大学における友人関係へと移行する期間である(Oswald & Clark, 2003)。このような移行期中で、入学後に新たに知り合った人と友人関係を築いていくことは、大学生活を適応的に送るうえで重要であると指摘されている(Swenson, Nordstrom, & Hiester, 2008)。

友人はソーシャル・サポートの源となり、精神的適応感へと影響を及ぼすことが示されている。例えば、友人からの情緒的サポートや道具的サポートが孤独感や抑うつへの低減に寄与することが示されている(和田, 1992)。また、グループをつくらせて、ピア・サポートを取り入れた介入を行う取り組みが、孤独感を低減させることも示されている(Mattanah, Ayer, Brand, Brooks, Quimby, & McNary, 2010)。

大学1年生を対象にした友人関係に関する研究では、「関係の初期分化現象」にみられるように(Berg & Clark, 1986)、比較的早い段階で親密な関係が形成され、その関係が安定し、継続することが指摘されている。山中(1994)では、出会ってから2週間で、約2ヶ月半後の関係の親密さが予測される結果が得られている。渡辺・今川(2011)でも、4月と6月において最も親しい友人として同じ人物を選択している人が全体の57.2%であったことや、6月と7月では67.1%であったことが示されており、親密な友人関係は関係開始時期から変化が少ないという

結果が得られているといえる。

大学生の友人との相互作用形態は対面(Face To Face: 以降、FTF と略す)でのコミュニケーションに加え、コンピュータを介したコミュニケーション(Computer Mediated Communication: 以降、CMC と略す)がみられるようになった(五十嵐・吉田, 2003)。ここ数年における日本では、スマートフォンの普及が急速であり(総務省, 2014)、スマートフォンを用い、ソーシャル・ネットワーキング・サービス(Social Networking Service: 以降、SNS と略す)を利用したコミュニケーションが多くみられるようになった。SNS によるコミュニケーションは1対1だけではなく、集団でコミュニケーションをとれることが特徴の1つである。

大学生の友人関係における SNS コミュニケーションは、時間と場所を問わずにできるという点で、それ以前からあった携帯メールを使用したコミュニケーションとそれほど大きな違いはないと考えられる。大学生は、FTF によって友人関係を形成した時に、時間と場所を問わず連絡できるように、SNS によるネットワークも同時に形成しようとする。大学生の友人関係では、FTF コミュニケーションが先行し、FTF コミュニケーションが頻繁に行われれば、SNS コミュニケーションもそれに応じて発展するといった関係があると考えられる。そして、次第に FTF コミュニケーションと SNS コミュニケーションが関係の親密化に相乗効果的に働いていくと思われる。

しかしながら、FTFコミュニケーションとSNSコミュニケーションは友人関係において異なる役割もあることを示唆する研究が報告されている。大学新入生の携帯メールについて検討した五十嵐・吉田(2003)では、友人数や接触頻度に4月と7月で差がないものの、メール相手の人数や送受信件数は増加することが示されている。友人関係形成時にはSNSコミュニケーションがFTFコミュニケーションの物理的・時間的制約に対する補完的な役割を果たして、機能的な違いはあまりないものの、時間が経つにつれ、FTFコミュニケーションは友人関係を形成した中でも、親密性の高い相手とのみ行うものになるのに対し、SNSコミュニケーションはそこまで親密ではない相手であっても、浅く広いつきあいをするために行われるので、拡大していく傾向があるのではないかと考えられる。

そこで、本研究の1つ目の目的として、大学生の友人関係におけるFTFコミュニケーション頻度とSNSコミュニケーション頻度を縦断的に調査し、これらのコミュニケーション・ネットワークの関係性を明らかにする。友人関係におけるFTFとSNSコミュニケーション・ネットワークは類似しており、それぞれ時間を経ても変化しにくいと考えられるが、五十嵐・吉田(2003)の結果を踏まえると、SNSコミュニケーション・ネットワークはFTFコミュニケーション・ネットワークと比較して変化が大きくなることが予測される。

これまで、友人の数や相互作用頻度は、友人関係の適応に影響があるとされてきた。友人の数が多いこと(Hartup, 1996; Newcomb & Bagwell, 1995)やキャンパスでの相互作用が多いこと(Hays & Oxley, 1986)が友人関係適応に影響がみられている。CMCに関しても、大学におけるフェイスブックを通じた友人の数が大学適応と関連があることや(Gray, Vitak, Easton, & Ellison, 2013)、携帯電話に登録されている友人数が自尊心と正の相関を示す結果(宮本, 2009)、CMCによる自己開示が親密度を高めるなど(古谷・坂田・高口, 2005)、FTFと同様に、友人数が多いことや、相互作用を行っていることは、適応感を高めると予測できる。

しかし、友人関係におけるFTFコミュニケーションとSNSコミュニケーションに機能的な違いがあるとするならば、FTFコミュニケーションとSNSコミュニケーションは同じように友人関係満足度を高めるとはいえず、関係を形成してからの期間によって異なる影響をもたらす可能性があるだろう。

そこで、本研究の2つ目の目的は、友人の数やFTFコミュニケーション頻度、SNSコミュニケーション頻度を縦断的に測定し、それらの変化量も加えて友人関係満足度を予測することを検証することである。親密な相手との相

互作用は重要であり、周縁的な関係になってくるほど重要性は低くなると考えられるので、時間とともに親密度が低い関係とも行うSNSコミュニケーション頻度は友人関係満足感に影響をもたなくなると予測される。

本研究では、5月、7月、10月、12月の計4回にわたって調査を実施する。本研究で調査対象者とする学生は、クラス単位での授業や学校行事などの活動が多く、必然的に関わり合うことが多い。5月にはグループごとの発表会も行われ、クラス全体の互いの顔と名前をほぼ見知った状態であり、クラス全員について回答させるのに支障がないと考えられる。

仮説は以下の通りである。1) 時間とともに、友人数やFTFコミュニケーション頻度は変化しないのに対し、SNSコミュニケーション頻度は増加する。2) FTFおよびSNSのコミュニケーション・ネットワークは4時点のいずれにおいても類似している。3) FTFコミュニケーション・ネットワークの時系列変化に比べるとSNSコミュニケーション・ネットワークの変化の方が大きい。4) 関係の初期段階(5月)においては、重要な友人・知人の人数、FTFコミュニケーション頻度、SNSコミュニケーション頻度は、友人関係満足感を予測する。5) 関係が形成されてから(7月、10月、12月)は、SNSコミュニケーション頻度やその変化量は予測しないのに対し、友人・知人の人数、FTFコミュニケーション頻度、およびそれらの変化量は友人関係満足感を予測する。

方法

調査対象者

大学1年生の同じ専攻のクラス集団64名(男性21名、女性43名)であった。平均年齢は18.33歳($SD = .54$, 5月測定時)であった。

手続き 質問紙法によって調査を実施した。大学の講義時に配布し、持ち帰って回答してもらい、後日回収するという方法をとった。

調査時期 2013年5月上旬、7月上旬、10月中旬、12月中旬(以降5月、7月、10月、12月と表記する)の計4回実施した。

質問紙の構成 フェイスシートでは、研究の目的、データの取扱いについて明記した。5月測定の基本情報としては、性別、年齢、SNSのアカウント登録の有無、について質問した。調査対象者にはIDを割り振っており、それぞれの調査回答時にIDを記入してもらった。

(1)ここ1ヶ月での重要と考える友人・知人とのFTFおよびSNS上でのコミュニケーション頻度:ここ1ヶ月(5月測定時)での重要と考える友人・知人をあげてもらった。同じ専攻の場合はIDを、専攻以外の場合はイニシャルを回答させた。さらに、その人物とFTFコミュニケーション

ンをどの程度行うかについて、ほぼ毎日、週数回、月数回、月1回以下から選択してもらった。また、SNSについても、ほぼ毎日(頻繁)、ほぼ毎日(多い)、ほぼ毎日(少ない)、週数回、週1回以下、から選択してもらった。7月の調査では「ここ2ヶ月で」といったように、2回目以降は前回の調査以降について尋ねた。(2) 友人満足感尺度(加藤, 2001):6項目であった。友人関係全般に対することについて回答してもらった。「全くあてはまらない」～「よくあてはまる」の5段階評定で測定を行った。

結果

基礎統計

欠測値がある場合は、その都度分析から除外した。

SNS アカウント登録 SNS アカウント登録の有無については Table 1 の通りであった。

重要と考える友人・知人の人数(同じ専攻) 同じ専攻で重要と考える友人・知人の人数の平均値と標準偏差は Table 2 の通りであった。また、その人物との FTF コミュニケーション頻度と SNS コミュニケーション頻度を得点化し(FTF:ほぼ毎日を4点、週数回を3点、月数回を2点、月1回以下を1点、SNS:ほぼ毎日(頻繁)を5点、ほぼ毎日(多い)を4点、ほぼ毎日(少ない)3点、週数回を2点、週1回以下を1点)、平均値と標準偏差を求めた(Table 2)。

FTF および SNS コミュニケーション・ネットワーク FTF コミュニケーション頻度の「ほぼ毎日」を1と得点化し、「週数回」、「月数回」、「月1回以下」を0と得点化した。また、SNS コミュニケーション頻度は「ほぼ毎日(頻繁・多い・少ない)」を1と得点化し、「週数回」、「週1回以下」を0と得点化した。64×64のマトリックスを作成し、対角行列には0を配置した。この行列を基に、ネットワークを描いた(Figure 1~4)。なお、このグラフは学生aが学生bを選択する場合と学生bが学生aを選択する場合を分けている有向グラフである。さらに、各ネットワークの構造指標として密度、推移性、相互性を算出した(Table 3)。FTF コミュニケーション・ネットワークと比べて SNS コミュニケーション・ネットワークは疎らであり、ネットワークを有していない者がいずれの調査時期においても10~15人程度みられた。

ニケーション・ネットワークは疎らであり、ネットワークを有していない者がいずれの調査時期においても10~15人程度みられた。

友人満足感尺度 5月、7月、10月、12月においてそれぞれ因子分析(主因子法)を行い、加藤(2001)と同様に1因子で抽出を行った。信頼性係数 $\alpha = .69 \sim .88$ と十分であった(Table 4)。そこで、6項目の平均値を友人満足感得点とした。それぞれの月の平均値と標準偏差は、5月で3.82($SD = .72$)、7月で3.86($SD = .58$)、10月で3.84($SD = .51$)、12月で3.95($SD = .54$)であった。

仮説の検証

重要な友人・知人の人数、FTF コミュニケーション頻度、SNS コミュニケーション頻度の変化 同じ専攻で重要と考える友人・知人の人数、FTF コミュニケーション頻度、SNS コミュニケーション頻度について、調査時期による差がみられるかを検討するために、参加者内分散分析を行ったところ、いずれも有意な差がみられなかった(Table 2)。したがって、仮説1は、友人数や FTF コミュニケーション頻度については支持されたが、SNS コミュニケーション頻度については支持されなかった。

専攻内の FTF および SNS コミュニケーション・ネットワークの類似性 FTF と SNS のコミュニケーション・ネットワークの類似性および5月、7月、10月、12月におけるネットワークの類似性を算出するために CUG(Conditional Uniform Graph)検定を行った。その結果、全ての時期において $r = .20 \sim .66(p < .01)$ の有意な正の相関が得られた(Figure 5)。したがって、仮説2は支持された。なお、時期の組み合わせや FTF と SNS コミュニケーション・ネットワークの組み合わせで相関係数の差の検定を行ったところ、5月から7月における FTF コミュニケーション・ネットワークの相関係数($r = .54$)と SNS コミュニケーション・ネットワークの相関係数($r = .23$)との間で有意な差がみられた($p < .05$)。また、5月から12月における FTF コミュニケーション・ネットワークの相関係数($r = .47$)と SNS コミュニケーション・ネットワークの相関係数($r = .20$)との間で有意傾向差がみられた($p < .10$)。

Table 1 SNS アカウントの登録状況

5月					7月					10月					12月				
T	F	L	m	P	T	F	L	m	P	T	F	L	m	P	T	F	L	m	P
48	17	58	7	8	49	22	59	8	8	56	22	63	7	6	56	21	63	7	7

T: Twitter F: Facebook L: LINE m: mixi P: プロフィールサイト

Table 2 同じ専攻で重要と考える友人・知人の人数および FTF、SNS コミュニケーション頻度の変化

	5月	7月	10月	12月	F 値
同じ専攻で重要と考える友人・知人の人数	7.95(3.80)	7.89(3.64)	7.92(3.40)	7.39(3.61)	1.07
FTF コミュニケーション頻度	3.65(.75)	3.77(.55)	3.83(.40)	3.74(.43)	1.46
SNS コミュニケーション頻度	2.16(.88)	1.98(1.08)	2.16(.94)	2.02(.84)	1.07

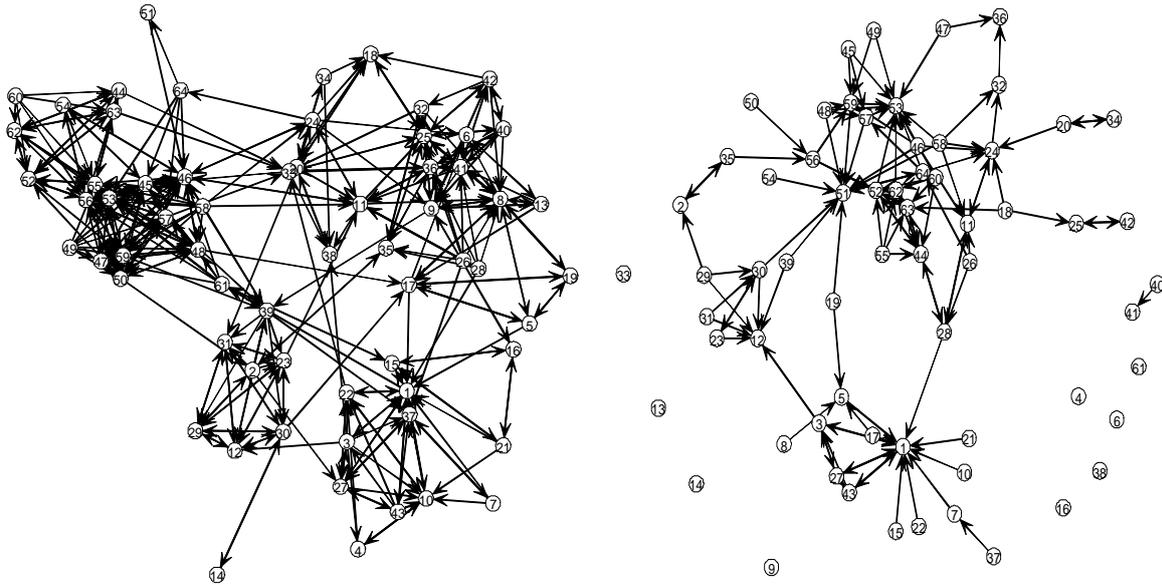


Figure 1 5月のFTFコミュニケーション・ネットワーク(左)とSNSコミュニケーション・ネットワーク(右)

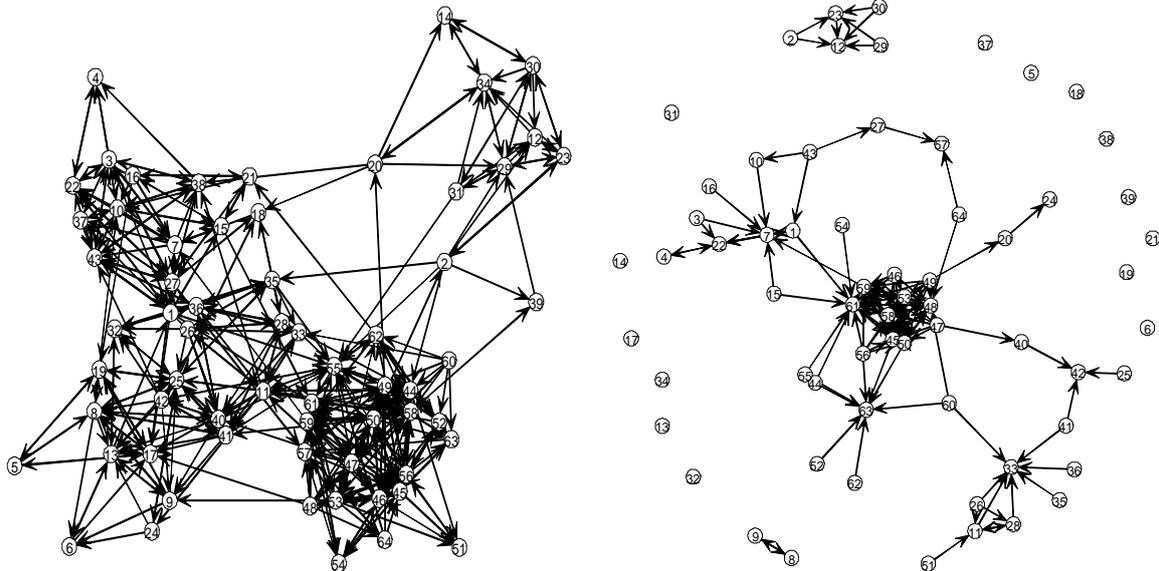


Figure 2 7月のFTFコミュニケーション・ネットワーク(左)とSNSコミュニケーション・ネットワーク(右)

したがって、仮説3は5月と7月の間においてと5月と12月の間においてのみ支持された。

友人関係満足感の予測 x 回目における調査の友人関係満足感を目的変数、x 回目の調査における重要と考える友人・知人の人数、FTF コミュニケーション頻度、SNS コミュニケーション頻度、x-1 回目の調査から x 回目における変化量として、専攻内友人・知人の数、FTF コミュニケーション頻度、SNS コミュニケーション頻度を説明変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。ただし、5月の友人関係満足感の予測については、5月の重要と考える友人・知人の人数、FTF コミュニケーション頻度、SNS コミュニケーション頻度のみを説明変数とした。その

結果、7月と12月を目的変数においたモデルが有意であった(Figure 6)。

7月においては、FTF コミュニケーション頻度の増加が正の影響を及ぼしていた($\beta = .31, p < .05$)。12月においては、専攻内の重要な友人・知人の増加($\beta = .31, p < .05$)および FTF コミュニケーション頻度の増加が正の影響を及ぼしていた($\beta = .25, p < .05$)。したがって、仮説4は支持されなかった。仮説5は、7月における FTF コミュニケーション頻度の変化および12月における友人・知人の人数の増加および FTF コミュニケーション頻度の増加のみ支持された。

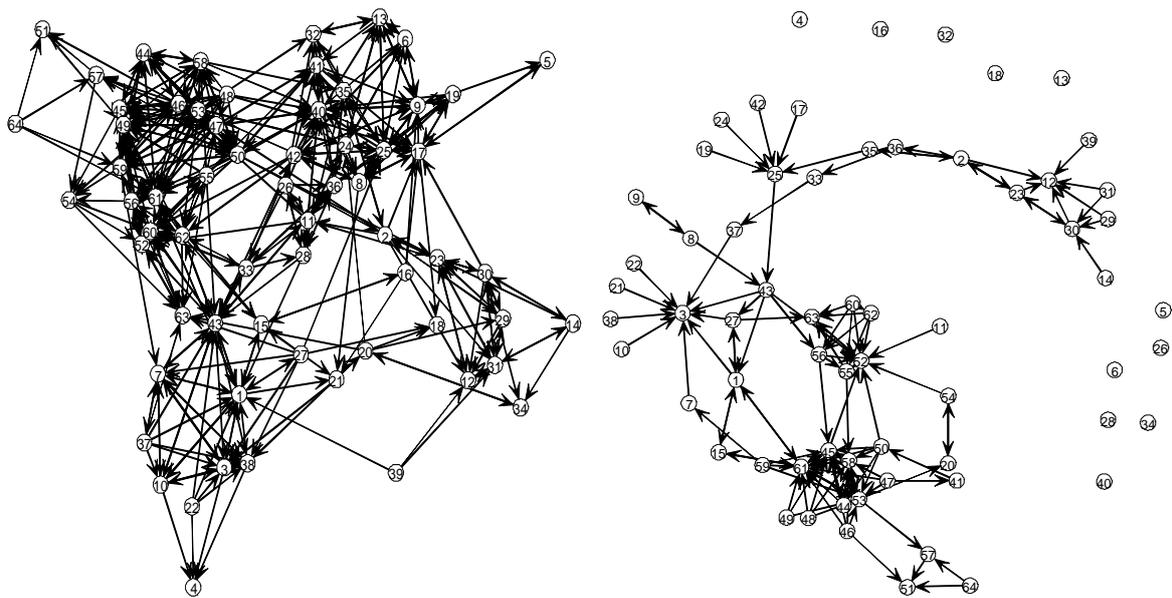


Figure 3 10月のFTFコミュニケーション・ネットワーク(左)とSNSコミュニケーション・ネットワーク(右)

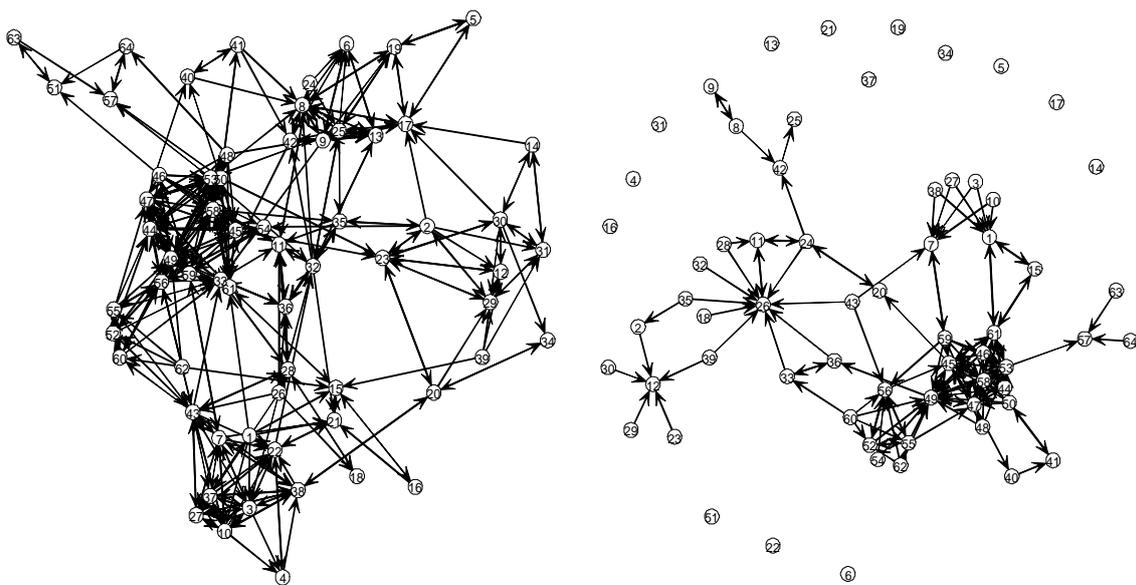


Figure 4 12月のFTFコミュニケーション・ネットワーク(左)とSNSコミュニケーション・ネットワーク(右)

Table 3 各ネットワークの統計量

	5月		7月		10月		12月	
	FTF	SNS	FTF	SNS	FTF	SNS	FTF	SNS
密度(density)	.09	.03	.11	.03	.10	.03	.09	.03
推移性(transitivity)	.49	.46	.48	.75	.48	.48	.52	.56
相互性(reciprocity)	.41	.19	.41	.20	.43	.16	.44	.23

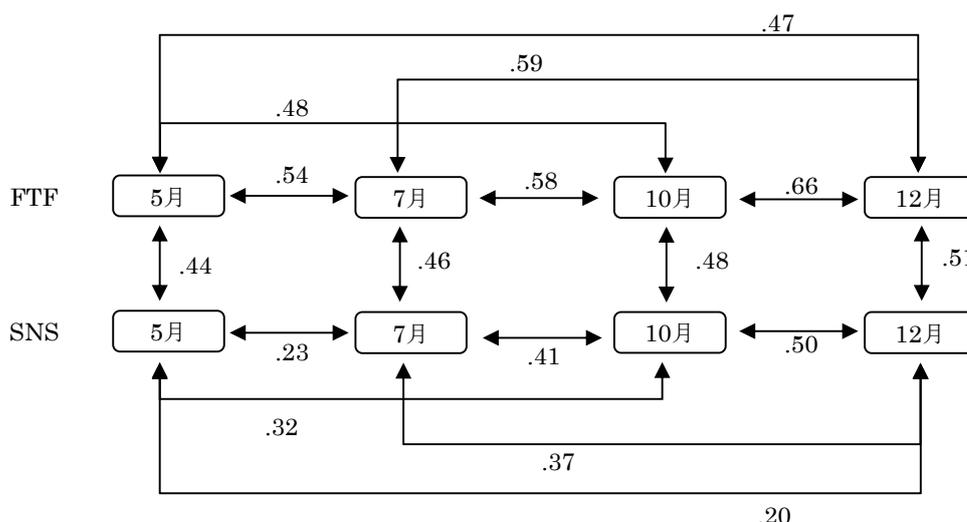
注)密度: ネットワークにおいて張ることのできる全ての辺に対する実際の辺の数の比率。

推移性: ノード(学生) i からノード j への有向辺があり、かつノード j からノード k への有向辺がある場合のうち、ノード i からノード k への有向辺がある比率。

相互性: 二者間において少なくとも一方の有向辺が存在する場合のうち、相互に有向辺がある比率。

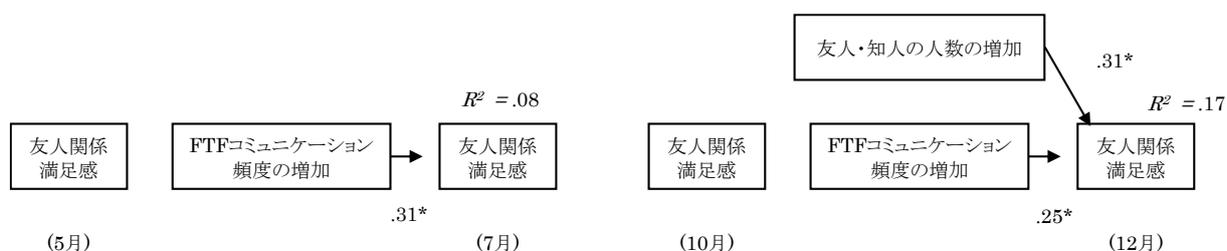
Table 4 各調査時期における友人満足感尺度の因子負荷量および信頼性係数

項目	因子負荷量			
	5月	7月	10月	12月
周囲の人達に受け入れられていると感じる	.89	.56	.69	.62
私は友達ととても気持ちが通じ合っている	.86	.82	.85	.86
自分を本当に理解してくれる人がある	.78	.71	.37	.65
自分を支持してくれる人がある	.67	.64	.38	.63
誰からも好かれていると感じる	.63	.54	.62	.42
心から親友と呼べる人がある	.62	.72	.33	.57
負荷量平方和(%)	56.27	44.74	32.66	40.78
信頼性係数(α)	.88	.82	.69	.79



注) 掲載数値はすべて $p < .01$

Figure 5 時期ごとの FTF および SNS コミュニケーション・ネットワークの類似性(相関図)



注) * $p < .05$

Figure 6 友人関係満足度に対する重要な知人・友人の数、FTF と SNS 態度、およびこれらの変化量

考察

本研究は、スマートフォンの普及に伴って、大学生が SNS を使用することが多くなったことを踏まえ、友人関係における SNS コミュニケーションの役割について FTF コミュニケーションと比較しながら検討を行った。具体的には、時系列的なネットワークの変化および友人関係満足感への影響を検討した。植田(2013)では、大学生における SNS の急激な普及が指摘されているが、本研究の調査対象者においても同様に高い割合

を示した。

まず、同じ専攻で重要と考える友人・知人の人数、FTF コミュニケーション頻度、SNS コミュニケーション頻度について、調査時期による差はみられなかった。また、FTF と SNS のコミュニケーション・ネットワークの類似性については、時期による変化は少なく、5月から7月、7月から10月、10月から12月といずれも類似したネットワークを示した。これらの結果を踏まえると、大学に入学してから比較的早い段階で形成される友人

関係が継続され、その相手と一定の FTF および SNS コミュニケーションをしていることになる。これらは、山中(1994)や渡辺・今川(2011)と整合する結果で、入学後比較的早い段階での友人関係の形成が重要な意味をもつことを改めて示すものであった。

次に、FTFとSNSコミュニケーション・ネットワークの変化の違いについて検討を行ったところ、5月から7月におけるSNSコミュニケーション・ネットワークの方が、FTF コミュニケーション・ネットワークよりも変化が大きかった。また、5月から12月におけるSNSコミュニケーション・ネットワークの方がFTF コミュニケーション・ネットワークよりも変化が大きかった。SNSコミュニケーション・ネットワークの統計量では、5月から7月にかけてと5月から12月にかけては共に推移性が高くなっており、この期間において友人を介したSNSコミュニケーション・ネットワークが形成されていると推察できる。一方で、密度や相互性は高くなっているとはいえ、ネットワークの拡充や双方向的な関係は形成されていないようである。このことから、SNSコミュニケーション・ネットワークの方が、対象が変わりやすく、浅い関係を形成していると考えられる。

友人関係満足感の予測に関しては、7月と12月においては影響を及ぼす変数がみられたものの、5月と10月においては予測する変数がみられなかった。今回の調査では、友人関係満足感全般の友人関係を対象に行った。したがって、専攻以外の友人関係に関する満足感も含まれたものを測定していた。おそらく、5月では高校の時の友人関係が、10月では夏休み中のサークルやアルバイト先の友人関係が、専攻内の友人関係よりも相対的に重要であり、友人関係満足感に占める専攻内の友人関係の重要性が相対的に低くなってしまっていた可能性が考えられる。

友人関係満足感には、いずれの時期においても、友人の数やFTFコミュニケーション頻度、SNSコミュニケーション頻度は予測しなかったが、一方で、友人の数の増加やFTFコミュニケーション頻度の増加という変化量に関する指標は友人関係満足感を予測した。7月においては、FTFコミュニケーション頻度の増加が友人関係満足感を高めていた。この結果から、友人関係を形成して以降は、友人の人数が増えることよりも、形成された関係において大学で対面でのコミュニケーションを行えることが友人関係満足感に繋がるといえる。これは、Hays & Oxley(1986)の研究と整合する結果であった。12月においても、夏休みを終えた後の関係において、同様なことはいえると考えられる。SNSコミュニケーションについては、FTFコミュニケーションの補完的な役割を果たしていると考えられるものの、単

独では友人関係満足感に影響を与えることはなかった。コミュニケーションの内容を精緻に検討しなければ理由は明らかにはならないが、SNSコミュニケーションはFTF コミュニケーションの準備機能を果たしている可能性が考えられる。例えば、「授業後に学食で集合」といったFTF コミュニケーションをとるための伝達に使われているような場合である。このような内容であるならば、SNSコミュニケーションの頻度だけでは友人関係満足感を予測するとは考えにくい。12月では、FTFコミュニケーション頻度の増加以外に、重要な友人・知人の人数の増加が正の影響を及ぼしていた。渡辺(2014)では、大学入学後の2ヶ月後から7ヶ月後あたりの親友は大学4年間というスパンの中では相対的に安定しているが、7ヶ月以降は変化がみられるという結果を得ている。つまり、後期の授業が始まってから、友人関係にわずかな変化がみられ、新たに重要な友人・知人を作ることが友人関係満足感を高めることになっていと考えられる。SNSコミュニケーション頻度に関しては、この時期においても重要な変数とならなかった。関係の初期段階においては、FTFコミュニケーション頻度、SNSコミュニケーション頻度の双方が重要であり、その後はFTFコミュニケーション頻度のみが重要になると予測していたが、結果は異なるものであり、SNSは時期を問わず、単独では友人関係満足感には影響をもつものではなかった。

以上より、本研究では、大学1年生の友人関係におけるSNSコミュニケーションをFTFコミュニケーションや友人関係満足感との関連からみてきた。SNSの普及により、大学生のコミュニケーション形態は変化しつつも、FTFによるコミュニケーションを行う機会をもっている場合におけるSNSコミュニケーションは、FTFコミュニケーションの物理的・時間的制約に対する補完的な役割を果たすにとどまり、いつの時期においても友人関係には対面での相互作用が重要であることを示唆する結果であった。

引用文献

- Berg., J. H., & Clark, M. S. (1986). Differences in social exchange between intimate and other relationships: Gradually evolving or quickly apparent? In V. J. Derlega & B. A. Winstead (Eds.), *Friendship and social interaction*. New York: Springer-Verlag. pp.101-128.
- 古谷嘉一郎・坂田桐子・高口 央 (2005). 友人関係における親密度と対面・携帯メールの自己開示との関連 対人社会心理学研究, 5, 21-29.
- Gray, R. A., Vitak, J. B., Easton, E. W. C., & Ellison, N. B. (2013). Examining social adjustment to college in the age of social media: Factors influencing successful transitions and persistence.

- Computers and Education*, **67**, 193-207.
- Hartup, W. W. (1996). The company they keep: Friendships and their developmental significance. *Child Development*, **67**, 1-13.
- Hays, R. B., & Oxley, D. (1986). Social network development and functioning during a life transition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 305-313.
- 五十嵐祐・吉田俊和 (2003). 大学新入生の携帯メール利用が入学後の孤独感に与える影響 心理学研究, **74**, 379-385.
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, **49**, 295-304.
- Mattanah, J. F., Ayers, J. F., Brand, B. L., Brooks, L. J., Quimby, J. L., & McNary, S. W. (2010). A social support intervention to ease the college transition: Exploring main effect and moderators. *Journal of College Student Development*, **51**, 93-108.
- 宮本聡介 (2009). 友人ネットワークサイズと自尊心の関連について 明治学院大学心理学紀要, **20**, 19-26.
- Newcomb, A. F., & Bagwell, C. L. (1995). Children's friendship relations: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, **117**, 306-347.
- Oswald, D. L., & Clark, E. M. (2003). Best friends forever?: High school best friendships and the transition to college. *Personal Relationships*, **10**, 187-196.
- 総務省 (2014). 平成 26 年度版情報通信白書 <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/pdf/n5300000.pdf> (2014 年 8 月 28 日)
- Swenson, L. M., Nordstrom, A., & Hiester, M. (2008). The role of peer relationships in adjustment to college. *Journal of College Student Development*, **49**, 551-567.
- 植田康孝 (2013). コミュニケーションを求める大学生気質—無料通話アプリ「ライン(LINE)」の急拡大— *Informatio: 江戸川大学の情報教育と環境*, **10**, 13-27.
- 和田 実 (1992). 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響 教育心理学研究, **40**, 386-393.
- 渡辺 舞 (2014). 大学生の友人関係は変化するか?—大学 4 年間の追跡的検討による大学適応感との関連について— 北星学園大学大学院論集, **5**, 67-81.
- 渡辺 舞・今川民雄 (2011). 大学新入生の友人選択状況が親密化に及ぼす影響 社会心理学研究, **27**, 31-40.
- 山中一英 (1994). 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究, **34**, 105-115.

註

- 1) 本研究では、近年のソーシャル・ネットワーキング・サービスの普及を踏まえて、SNS という用語を使用しているが、これまでの CMC とは異なる特徴がある点を強調するために使用しているわけではない。したがって、本研究に関しては、SNS を CMC と置き換えても不都合はない。

Face-to-face (FTF) communication and social networking services (SNS) communication among freshmen in college

Masayuki KUROKAWA (*Faculty of Education, Aichi University of Education*)

Kumi YOSHITAKE (*Faculty of Human Environments, University of Human Environments*)

Makoto NAKAYAMA (*Suzuka Junior College*)

Koji MISHIMA (*College of Contemporary Education, Chubu University*)

Ayako ONISHI (*Faculty of Letters, Konan University*)

Toshikazu YOSHIDA (*Faculty of Education, Gifu Shotoku Gakuen University*)

The aim of this longitudinal study was to explore face-to-face (FTF) communication and social networking services (SNS) communication among freshmen in college. Participants were 64 undergraduate students who answered a self-report questionnaire four times during their freshman year: one month after beginning college (May), July, October, and December. The results showed that, across the four points, there were no differences in the students' reported number of friends and frequency of FTF and SNS communication. The conditional uniform graph test showed a significant positive correlation between the four measures of FTF communication networks, as well as between SNS communication networks. However, SNS communication networks were less correlated between May and July, and between May and December, when compared with correlations of FTF communication networks during those same periods. The increasing frequency of FTF communication use predicted satisfaction with friends in July and December. The increasing number of friends predicted satisfaction with friends in December.

Keywords: freshmen, undergraduate students, face to face, social networking services, satisfaction with interpersonal relationships.